

■シリーズ 沼津兵学校とその人材 111

沼津兵学校関係人物とドイツ

■江原素六とその周辺 71

親友だったとされる藤沼牧夫のこと

■富士・沼津・三島三市博物館巡回展開催中

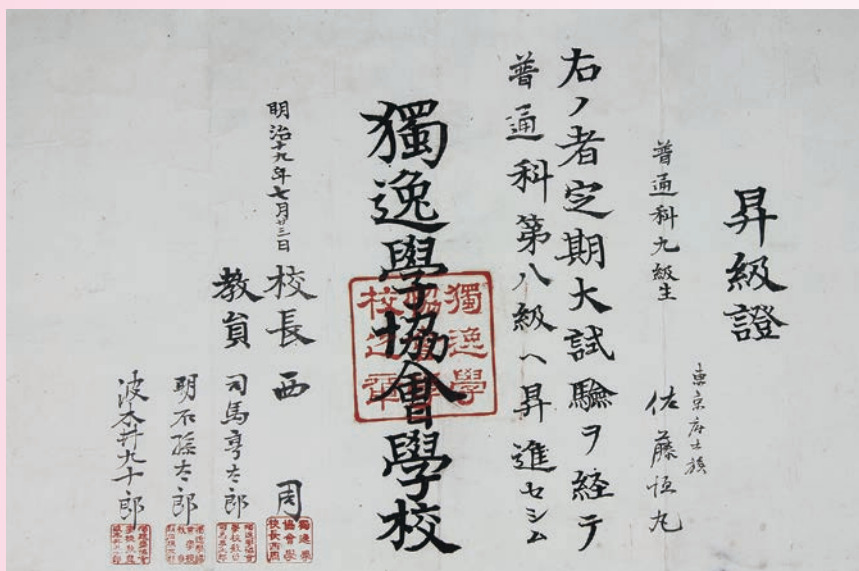
■催しものの御案内

■館外展示のお知らせ

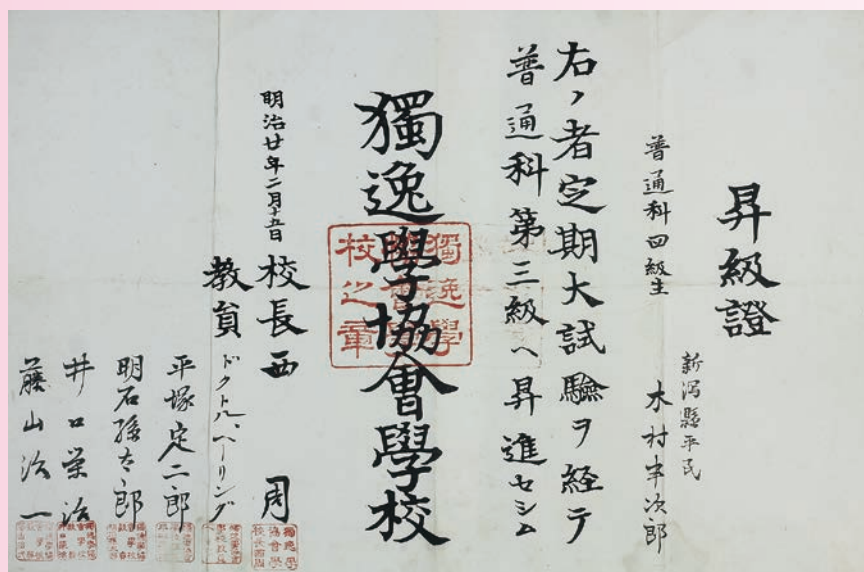
二〇二四年七月

通巻158号

沼津市明治史料館通信



明治19年 (1886)



明治20年 (1887)

独逸学協会学校普通科の昇級証

当館蔵

校長西周の名が記される。

沼津兵学校関係人物とドイツ

フランス式を採用した幕府陸軍の後継者である沼津兵学校から輩出して明治陸軍の将校となった人々は、当初は明治政府の陸軍がフランス式とされたこともあって、当然のようにフランス流の陸軍のノウハウを長く学び、身に付けた。

下の表は、沼津兵学校の教授・生徒、沼津兵学校附属小学校の生徒、沼津病院の生徒など、沼津兵学校関係人物のうち、海外留学を体験した者の派遣先を国別に一覧にしたものである。幕末に留学した西・赤松はオランダ、山内・熊谷はフランスであるが、維新後に留学した者たちの場合、フランスに派遣された陸軍軍人が目立つほか、イタリア・アメリカ・イギリス・ドイツといった国々も派遣先に加わっている。特にドイツは、陸軍と医学の分野で多くの日本人留學生の受け入れ先となった。陸軍の場合、フランス式からドイツ式に切り替えられたことが大きい。普仏戦争に勝利し、統一をなすとげ、急速に躍進するドイツ帝国の姿は、後発の日本にとっては模範とすべき存在



オランダ留学時の西周
当館蔵

となったのである。陸軍大将井口省吾、医学博士榊俣・荻生録造・宇野朗らの成功の背景に、ドイツ留学があったことは間違いない。

幕末にオランダで西洋の学問を学び取った西周も、明治期になるとドイツに傾倒していった。専門とする哲学をはじめ、ヨーロッパの学術界においてドイツの占める高い位置がより明確に把握できるようになったからである。彼が校長をつとめた学校としては（京都や東京で開いた私塾は別にして）、沼津兵学校ともう一つ、独逸学協会学校がある。現在の獨協大学や獨協中学校・高等学校のルーツにあたる同校は、明治一六年（一八八三）に東京で開校した。西はその初代校長（明治一六〇二〇年）となった。

学校の設立母体となった一四年（一八八一）結成の独逸学協会は、民権派（英仏派）に対し国権を重視する立場から、ドイツ文化の移入・振興を目的とした団体であり、二二年（一八八九）時点の会員名簿では、沼津兵学校関係者のうち西周・橋爪源太郎（兵学校寄宿舎生徒、大学南校でドイツ語専攻）・和達亨嘉（沼津郡政役所郡方、旧名雄次郎）が含まれる。沼津兵学校で教えられたのは英仏語であり、静岡学問所のように学科にドイツ語はなかったものの、その後、関係者・出身者た



ドイツ留学時の井口省吾
個人蔵

ちの一部は、明治の世相や学術界の趨勢から影響を受け、ドイツへの傾斜を強めていったのである。西が独逸学協会学校の校長をつとめたことは、そのことを象徴している。蛇足ながら、静岡学問所でドイツ語を担当した近藤鎮三・相原重政（松波升次郎）も独逸学協会会員になっているほか、相原安次郎・石川千代松・加藤弘之・永峰弥吉・原退蔵・人見寧・森醇ら、その他の旧幕臣・静岡藩関係者も会員中に見出せる。

（樋口雄彦）

沼津兵学校関係人物の海外留学先

留学先	人名
オランダ	西周 赤松則良
フランス	山内勝明 熊谷直孝 加藤泰久 小島好問 村田惇 天野富太郎
イタリア	山口 勝 栗山勝三 村田惇
イギリス	石橋絢彦 真野文二
アメリカ	渡瀬庄三郎（服部綾雄）
ドイツ	井口省吾 榊俣 渡部朔 荻生録造（宇野朗）

（ ）内は沼津病院生徒、および附属小生徒だった事実疑問のある者。海外視察・海外赴任は含まない。



榊俣
榊愛彦氏提供

親友だったとされる藤沼牧夫のこと

江原素六は、敬虔なクリスチャンとして禁酒運動に携わったが、もともと酒には強く、若い頃には大酒を飲んだこともあったらしい。講演録の中には、そのことを自ら告白したものがあつた。要約すると以下のよう内容である。

「無二の親友」だった藤沼牧夫は、「漢学者にして剣術の名人」でもあり、山岡鉄舟にも信頼された人物だった。藤沼は品川・清水間で航海事業を起こすため、大金で蒸気船を購入したが、品川沖を出航する際に汽缶が爆発するという事故があり、縁起が悪いということでその船を「阿波の豪商井上甚太郎」に売却することとした。江原はその蒸気船購入時に不足分「千円」を藤沼に貸していたため、それを取り返すべく急いで沼津から上京したものの、築地や下谷で芸者をあげての藤沼の遊興に巻き込まれ、二人して飲み歩き、船一隻分の代金を使い果たしてしまったという（『勤労と快楽』「江原素六先生伝」、講演・四六（四七頁）。江原にとっては、若気の至り、あるいは「武勇伝」ともいべきエピソードである。

ところで、この藤沼という人物のことである。彼は、明治三年（一八七〇）時点では静岡藩の開墾方に属し、その記録掛の任にあつた（『静岡御役人附』）。遠州牧之原の字瓜ヶ沢などに開墾地を所有し（『牧之原土族開墾地絵図』）、開拓に従事したわけであり、山岡鉄舟との人脈もその関係だったと推測される。その後は、中泉郡政役所などに勤務、廃藩後は浜松県十一等出仕、静岡県十等出仕、九等出仕、権典事、権大属などを歴任し、六年（一八七三）二月三日に県庁を免職となつている（『明治初期静岡県史料』第一巻）。明治三年から翌年にかけて遠州磐田郡で起きた農民たちによる大池開墾紛議では、「中泉郡方御頭藤沼蒔雄」として史料に登場する（『大池事件と松岡霊社』）。明治七年時点で二八歳であり、江原より四歳ほど年下だったことになる。五年八月から九月にかけては、山梨県で起きた農民騒擾（大小切騒動）を鎮圧するため、「惣括」として狙撃隊、すなわち沼津在住土族二〇〇名を率い出兵している（大庭晃「旧幕臣坂上鉄太郎日記」『沼津市博物館紀要』30）。七年四月、静岡県が静岡学問所の後身賤機舎のお雇い外国人教師としてカナダ人宣教師マクドナルドを雇用した際には、人見寧とともに「藤沼牧夫代理」として杉山孫六が「条約書」に署名していることから、県の学事にも関与していたことがうかがえる。

藤沼が賤機舎に関与したことからすると、二人の親交は、静岡藩時代ではなく、江原が学区取締となつた時期、すなわち廃藩後の学事に関わる頃から生じたものか。また、蒸気船購入の件は、多額の金を動かしている点から、個人の仕事であるとは考えられず、静岡藩あるいは静岡県の事業、具体的には静岡の常平倉（静岡商法会所の後身）や沼津商社会所に関わることだったのか？ 江原の談話に登場する阿波の豪商井上甚太郎とは、近世中期から沼津宿で藍商・金融業を営んだ阿波国小松島出身の豪商、鹿島屋甚太郎（第九代）こと井上三千太のことであり、彼は浜松県の茶輸出事業にも関与した（『静岡県史資料編16』、九九三頁、一〇〇〇頁）。当初藤沼は浜松県に奉職していたことから、ひょっとすると蒸気船は浜松県での製茶事業に関係するものだったのかもしれない。ただし、当時井上が保有した蒸気船は明治三年に徳島藩から譲り受けた鵬翔丸（旧名戊辰丸）だけだったようであり（『徳島藩の史的構造』、一九七五年、名著出版）、その点は合致しない。

沼津兵学校附属小学校の生徒だった黒川正は、大正期の回想録において、「江原翁や藤沼牧夫、人見寧、梅沢敏の諸君も当時の高等壮士であつた」と述懐している（『静岡時代の回顧（一）』『静岡民友新聞』一九一三年八月一日、『静岡県近代史研究』第二三号に転載）。すなわち、明治初年において、藤沼は人見・梅沢・江原らと並ぶ、一種の壮士（志士的な気概を持った血気盛んな青年）であると認識されていたらしい。人見は箱館戦争の生き残り、梅沢も奥羽での脱走・抗戦経験者だったし、江原の前歴については言うまでもない。藤沼については、新政府軍と戦つた回天隊の隊長「藤沼幸之丞」と同一人物かとする文献もあるが（東光司『徳川脱藩人事典』、二〇一九年、徳川脱藩人調査会）、幸之丞は下総で戦死したともいわれ、確証は得られていない。

江原素六が残した文書の中には、藤沼からの書簡が一八通も残り、事業・借金・身内の葬儀のことなどが記され、確かに二人が親しい間柄だったことが裏付けられる。その内の一通には、「西洋形船舶」云々といった内容があり（当館蔵・江原文書E-a-549）、江原が語り残した蒸気船購入の一件と関係するものかもしれない。年代が記されていない手紙が多いが、中には「四十三年十二月十五日」の日付が入つたものもあり、明治後期まで健在だったようだ。江原の日記には、静岡の藤沼を訪問したり、その逆があつたり、手紙が到来したといった記述が見られ、少なくとも明治一七年（一八八四）からその翌年頃までは頻繁な交際が続いたことがわかる。一八年時点で藤沼は、静岡馬場町や安倍郡大岩村に居宅を所持していた（『駿遠に移住した徳川家臣団』第四編）。

富士・沼津・三島三市博物館巡回展

「石器とくらし—愛鷹・箱根西麓の旧石器文化とその周辺—」開催中！

【沼津会場】6月29日（土）～9月1日（日）

令和6年度 富士・沼津・三島三市博物館巡回展

愛鷹・箱根西麓の
石器とくらし
旧石器文化とその周辺

関連事業
クイズに答えてオリジナルクリアシオリをゲット！
※数くなり次第終了

ギャラリートーク（各回30分程度）
・沼津会場 7月13日（土）11時～
9月10日（土）11時～（要申込、詳細は055-923-3335）
・富士会場 9月14日（土）13時30分～
10月12日（土）13時30分～（申込不要）
・三島会場 11月9日（土）11時～/13時30分～（申込不要）

巡回スケジュール

沼津会場	富士会場	三島会場
6/29日 ▶ 9/1日	9/7日 ▶ 10/20日	10/26日 ▶ R7/1/5日

沼津市明治史料館
富士山かやぐらミュージアム
三島市郷土資料館

富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会

本展は、富士・沼津・三島三市博物館協議会で隔年開催している巡回展です。

富士市・沼津市にまたがる愛鷹山や三島市にかかる箱根山西麓には、数多くの旧石器時代の遺跡があります。愛鷹・箱根西麓には約38,000年前から人が住み始めていることが分かっており、遺跡からは多数の石器(石の道具)の他、旧石器時代では珍しい陥し穴や石で囲って作った炉(調理場)といった生活の痕が見つかっています。

今回の展示では、愛鷹・箱根西麓の旧石器時代について解説するとともに、1977年に日本で始めて旧石器時代の遺跡として国指定史跡となった休場遺跡(沼津市)について紹介しています。

また、「旧石器クイズ」の参加者にはオリジナルのクリアしおりをプレゼントしています！

▼展示の様子▼



催しものの御案内



謎解き！沼津歴史探偵

日時 7月24日(水)～8月28日(水)
内容 謎解きを通して沼津市の歴史について学びます。
対象 どなたでも
参加費 不要(観覧料は必要 市内小中学生は無料)
申込み 受付でお申し出ください



ナゾトキーヌ



古文書解読入門講座

日時 10月5日～11月2日の土曜日 全5回
9時30分～11時30分
内容 古文書に初めて触れる方を対象に、郷土の史料をテキストとして、自分の手で歴史をひもとく楽しさを味わいながら、くずし字を読めるよう学習します。
定員 10名(先着順)
参加費 無料
持ち物 筆記用具、くずし字辞典(持っている人)
申込み 9月10日(火) 9時から電話または直接

館外展示のお知らせ

第21回明治史料館 館蔵資料展

「殿さまたちのときめくキャンバス ～歴代沼津藩主の書画～」

日時 9月5日(木)～9月26日(木)
内容 初代沼津藩主水野忠友から、幕末の沼津の藩主水野忠敬までの8人の歴代藩主の書画などを、人間味溢れる逸話を添えて展示します。
場所 沼津信用金庫本店ストリートギャラリー
沼津市大手町5丁目6-16



沼津市明治史料館通信

第158号

令和6年7月31日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055-923-3335
FAX 055-925-3018
印刷 みどり美術印刷株式会社



◀ 2代水野忠成画猿猴図
7代水野忠誠筆「寿雲」▶

